

私の好きな関西大学博物館の展示品

鹿角製刀剣装具を巡る憶測

山内 紀嗣

関西大学博物館の常設展示室には福岡県高上山古墳出土とされる鹿角製の刀剣装具が展示されている。「重要美術品」と書かれているから戦前の指定とわかる。資料は関西大学博物館の基礎となった本山彦一氏の資料であり、『本山考古室要録』に掲載されている（末永1935）。1973年発行の『考古学資料図鑑』（関西大学文学部1973）にはこの3点の写真が掲載されており、駒井功氏が解説文を書かれている。その当時は3点とも高上山古墳出土品とされていた。さらに1998年発行の『博物館資料』（関西大学博物館1998）には『考古学資料図鑑』の文章が再掲され実測図も掲載されている。図1はこれによる。2010年になり、井上一樹氏がこれらの資料の検討を行い、鞘尻は奈良市墓山1号墳出土であることを確認している（井上2010）。高上山古墳は現在、どの古墳なのかはまだ不明である。

1は鞘尻である。長さ5.1cm。側面には周囲を2回転するように直弧紋が線刻される。端面にはこれも線刻された紋様があり、赤彩される。

鞘尻は二枚合わせの鞘木をとめるキャップの役目でもあった。端面の形状は背と腹が上下対称形にならず倒卵形であることから、刀の鞘尻であったことがわかる。紋様については井上氏が詳細に分析している。また、1は井上氏が調べているように奈良市円照寺墓山1号墳出土のものであることが判明している。

2は柄であるが実用の装具としては小型であり、刀子の柄と考える。残存長8.9cm。柄頭端面の紋様についてはこれも井上氏が詳細に検討しているが、やや簡略化されたものである。これにも赤彩が残る。一般に、5世紀の鹿角製刀装具は柄頭と柄縁が鹿角であっても柄間は木製であることが多いが、これは小型であるためか一本の角から作られている。柄頭端面は上下に断面V字形の溝を設け、腹側を切り欠いて段を設ける。この溝と段は正しい鹿角製柄の製作法である。しかし、本来ならこの溝と直行する溝もあるべきだが、それは省略されている。

3は柄縁である。鹿角の又部を用いて製作されたもので、両側面には元の自然面があり、赤彩される。長さ7.8cm。側面には部分的に立体的な直弧紋が残る。柄縁は側面から見て広がる側に段がありやや突出するが、この段に鞘木が被さり、鞘木も柄縁と対応するように広がる鞘縁があったであろう。狭くなる側には柄木が続くことになる。また、柄縁の一方に突起部があったはずであるがこれは欠失している。しかし、突出部があった端面が平坦になっているところから、別材の鹿角を組み



写真 鹿角製刀剣装具
(関西大学博物館1998)

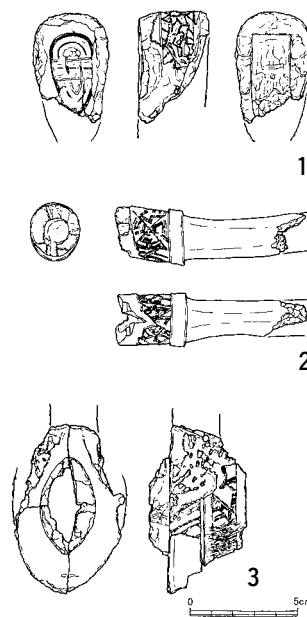


図1 鹿角製刀剣装具
(関西大学博物館1998を改変)

合わせた突起部であったとわかる。5世紀代の典型的な剣装具である。

2・3のような鹿角製刀剣装具はどのような経過を経て生み出されたのであろうか。古墳時代の刀剣装具は基本的に木製だが、鹿角製の装具は古墳時代中期の剣に特有なものである。鹿角製装具は朝鮮半島南部では倭系の人たちと関わりのある墓から出土することはあっても半島に系譜が辿れるものではない。そうすると日本列島内で生み出されたものと考えざるを得ない。

鹿角という材質による性質から出土例は多くない。古い鹿角製剣装具は弥生時代の東日本にある。群馬県新保田中村前遺跡では中期後半のものがある。さらに神奈川県池子遺跡、同県三殿台遺跡、静岡県登呂遺跡など後期の遺跡の出土例がある。これは古墳時代の鹿角製剣装具が柄頭・柄間・柄縁の3部構成であるのと異なり、柄頭から柄縁まで1本の鹿角である。しかし、弥生時代の1本作りの柄が古墳時代の鹿角製剣装具の起源と考えざるを得ない。

弥生時代後期から末期には『三国志』魏書東夷伝倭人の条にみられる邪馬台国、それと対峙する東国（狗奴国）との戦いがあったらしい。邪馬台国があったとすれば、それは現在の奈良

県である可能性が高い。それは当時の王墓が大和に集中していることなどからもわかる。弥生時代末期から古墳時代初頭の頃の戦闘の様子は不明であるが、弓矢以外の接近戦では当然、剣も使用されたであろう。邪馬台国側の武器では木製装具の鉄製の刀剣に木製の装具であったろうが、狗奴国側には鹿角製の剣装具も使用されたと想定できる。

最近、奈良県桜井市纏向遺跡の第195次調査で流路中から鹿角製の1材作りの剣の柄が出土した（飯塚健太氏のご配慮により拝見する。未報告）。ここからは木製の刀剣装具も出土しており、武器の工房もあったと考えられる。流路の時期は纏向3式期であるらしい。纏向3式期は実年代に異論はあるがおおむね3世紀半ばから後半に相当するという。そうすると女王卑弥呼が死亡してからになる。この時期は狗奴国との戦闘はおさまっているはずである。その頃には邪馬台国まで東国の剣が伝わり東国風の剣も製作されるようになったのであろう。

しかし、このような弥生系の鹿角製剣装具が5世紀代の組み合わせ式剣装具に発展した経緯は不明である。柄縁の突起はよく似るが柄頭の形状は新たに創出されたものである。古墳時代前期の刀剣装具についてはまだ不明な点が多い。前期の剣装具の出土例が増加すれば形態の変遷について辿ることができるようになるはずである。この種の剣装具は6世紀末の奈良県藤ノ木古墳頃まで製作される。約700年間も剣装具として使用されたのである。関西大学に所蔵されている鹿角製柄縁は最盛期のすばらしいものの代表例である。

【参考文献】

- 井上一樹 2010「関西大学博物館所蔵鹿角製刀剣装具の直弧紋」『立命館大学考古学論集V』
 関西大学文学部 1973「132 鹿角刀装具」『考古学資料図鑑』
 関西大学博物館 1998「62 鹿角刀装具」『博物館資料』
 末永雅雄 1935『富民協會農業博物館 本山考古室要録』
 豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号

関西大学非常勤講師

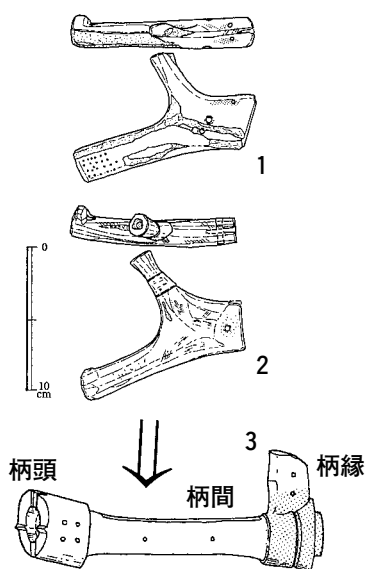


図2 弥生～古墳時代の剣装具

1は新保田中村前遺跡、2は池子遺跡出土鹿角製剣装具。3は古墳時代の模式図、(アミ部分が館蔵のもの相当部分)

(1、2は豊島2004を改変)